
トリガーを引くもの

Ｊ・Ｐ・フリーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリガーを引くもの

【Nコード】

N4258V

【作者名】

J・P・フリーマン

【あらすじ】

職探しに疲弊した向田頼斗は静養のため、叔父が経営する旅館に赴くことになった。最初は陰気な影を引きずっていた頼斗も、素敵な女性と出会うことで徐々に元気をとり戻していった。しかしその矢先、叔父の所有する小屋で殺人が起こる。しかも現場は密室という奇怪な状況だった。警察も困惑するなか、頼斗は旅館に泊まっていた犯罪捜査コンサルタントとともに事件を調べることに……

起の章：田舎での出会い

ある日の昼下がり、バスは川沿いの田舎道を走っていた。実にいい天気であった。空は青々と晴れ、春のやわらかい日差しが地上に降り注いでいた。その光を浴びて水面はきらめき、その様子は川の向こう岸の草や木の緑とすばらしく調和して、美しい自然の風景をつくりだしていた。

そんな景色を目の当たりにしても、数少ないバスの乗客である向^む田^こ頼斗は沈んだ気持ちのままだった。そもそも今の彼には外の景色を美しいと感じるだけの余裕がなかった。職を無くして半年、頼斗はまだ光明が見えずにいた。

頼斗が無職になったのはリストラにあったからではない。彼が勤めていた会社自体が潰れてしまったのだ。彼はコンピュータの中に入っている回路基盤を製造する会社に勤めていた。入社して五年目、頼斗がこれから更なる活躍を目標とした年にもかかわらず、世界に蔓延している不況という濁流に会社はとうとう耐え切れなくなり、飲み込まれてしまった。その日から頼斗は悪戦苦闘の日々に身をおくことになった。

実家に戻ってから、頼斗の再就職活動が始まった。求人広告を読み漁り、いろいろな会社の面接を受けたが、どれもこれもだめであった。頼斗は情報収集、面接、不採用という負のスパイラルを作り出して、今に至っているのだ。そもそも頼斗は優秀な頭脳の持ち主ではなかった。何度も不採用を繰り返すうちに、頼斗の精神は日に日に危うくなっていった。まず、両親とあまり話をしなくなった。それから自宅、それも自室に閉じこもり、外出する回数が極端に減った。そしてとうとう両親の顔までまともに見られなくなる始末であった。最終段階はおそらく自殺になるだろう。

そんな息子の状態を見てられなくなった彼の両親は息子にある提案をした。それが今回の、田舎にいる叔父の健二^{けんじ}のところへの訪問

だった。両親は、息子には落ち着いた場所での静養が必要と判断したのだった。というわけで、田舎で旅館を経営している健二に連絡をとり、健二の快い協力を得たことで、この旅行が予定された。あとは、頼斗がこの提案を受けるかどうかだったのだが、そのときの頼斗は未だに実家で暮らしている後ろめたさから、親の言うことは何でも受け入れていた。頼斗はこの提案に二つ返事をした。

バスは目的のバス亭に到着した。ここで健二が頼斗を迎えに来る予定になっていた。頼斗はバスを降りて、辺りを見回した。健二は車道の向こう側で煙草を吸っていた。バスが発券すると、健二のほうも頼斗の姿を認めたようだった。頼斗は手に持った旅行かばんを揺らしながら、小走りで健二に近づいた。

「こんにちは叔父さん」

「おう！ 久しぶりだな、頼斗。元気でやっとなるか？」健二は笑顔で、力強い声を響かせた。向田健二は六十近い年齢だったが、エネルギッシュな人物で、生命力が溢れていた。今の頼斗は彼の前では死人に等しかった。

「ああ、はい何とか」元氣なく頼斗は答えた。

「じゃあ早速行こうか。さあ乗った、乗った」

健二が運転する車は旅館に向けて走り出した。頼斗がまだ子供だった頃は、夏休みなどの長期休暇を利用して家族で叔父の経営する旅館に泊まりに行っていた。しかし頼斗が高校に入学するとそういった機会はなくなり、叔父と顔を合わせることもなくなった。頼斗が叔父と会うのは、八年前の祖父の葬式の時以来だった。頼斗にとって今日は久しぶりの再開なのだが、頼斗は叔父が老けたという印象を受けなかった。短く刈った髪に白いものが混じるようになってはいたが、角張った顎も、大きくて低い鼻も、横に笑い皺のある少し細い目も、浅黒く焼けた肌も八年前の記憶と変わらなかった。筋肉も衰えておらず、中肉中背の頼斗より一回り大きな体をしていた。

移動中は、健二が話し手で、頼斗が聞き手になった。健二は最近

あつたおもしろい出来事や、自慢話を披露した。健二は自分の経験談を話するのが好きなのだ。そのため、頼斗自身についてあれこれ聞くようなことはしなかった。頼斗にはそれがありがたかった。

三十分ほどして健二が経営する旅館、《深緑荘》に到着した。《深緑荘》は旅館と呼ぶにはかなり小ぶりの建物だった。それもそのはず《深緑荘》には宿泊部屋が八部屋しかないのだ。それは二階建ての木造作りの建物で、建物の横には専用の駐車場があつた。深緑という名がつく割にはあたりが森に囲まれているわけではなく、むしろ開けた場所にあり、草むらに囲まれて建つていた。建物の正面玄関から向かいを見ると遠くのほうに民家を十数件ほど見ることができた。民家とは別に旅館から五十メートル程度離れた場所に、草むらに囲まれた小屋があつた。頼斗が昔来たときにはなかった小屋だった。

頼斗は健二の後に続いて旅館のなかに入った。そこは昔と変わっていないかった。ロビーのすぐの右手には受付のカウンターテーブルがあり、反対には客がくつろぐための椅子八脚とテーブル二つが置かれていた。正面には二階へ上がるための階段が目に入った。あの階段の下にドアがあり、そこからは叔父夫婦のプライベート空間に通じていた。ロビーからは二つの通路がのびており、右は食堂、左は一階の客室に続いていた。

二人が旅館に入ると、健二の妻、向田由紀ゆきが頼斗を迎えた。

「あら、いらっしやい頼斗君」由紀は笑顔で、そのまるまるとした体と軽くパーマを当てた髪を揺らしながら、頼斗に歩み寄った。

「本当に久しぶりね。大きくなって。ここにくるまで疲れたでしょう。部屋まで案内するわ。二階の部屋を用意したのよ。そのほうが見晴らしがよくていいでしょう」

頼斗は笑顔で礼を言った、どうもぎこちない笑顔になってしまった。頼斗は由紀に部屋まで案内された。そこは畳の敷いてある和室で、部屋の隅にはテレビ、真ん中に背の低いテーブルが置かれていた。窓からの柔らかい光が部屋を照らし、暖かくしていた。部屋にはき

ちんと洗面所とトイレと風呂も完備されていた。

「それじゃあ、夕食まで自由にしていいいからね。七時になったら食堂に来てね」そう言うのと由紀は部屋から出て行った。

頼斗という間は笑顔を絶やさなかった。頼斗は早くもここへ来たことへの後悔を始めた。ひどく居心地が悪いのだ。旅館や叔父夫婦に不満があるわけではない。ただ、二人は自分をやさしく迎え入れてくれた。今ここを訪れている自分はただの厄介者に過ぎないと言うのに、二人とも自分の訪問をとて喜んでいるのだ。二人は自分に気をつかってくれているのではないかと思うと、頼斗はひどく心苦しかった。頼斗は一週間ここに滞在するのだ。

頼斗は絶望的な気持ちになってきた。部屋にこもっていてもネガティブな考えが浮かんでくるだけだった。とにかく外に出て気を紛らわそう。頼斗は部屋を出た。階段を下りて一階に着いたとき由紀が声をかけてきた。

「おや、おでかけかい」その口調は相変わらず陽気なものだった。「ちよつと散歩してきます」こう答えると、逃げるようにして足早に外へ出た。

頼斗はなんのあてもなく道に沿って歩き続けた。ときどき立ち止まってはあたりの景色を見回したが、気持ちが晴れることはなかった。見えるのは木や草や田畑ぐら이었다。どれくらい歩いただろうか、頼斗は坂道を登っていた。頼斗は時計を見た。そろそろ帰らないと夕食に遅れてしまう。そう思って振り返り元来た道を戻り始めたときだった。

「きゃあ！ どいて、どいて！」

女性のキンキンした悲鳴が後ろから聞こえてきた。頼斗は何事かと思い後ろを振り返った。そして凍りついた。なんと自転車に乗った女性が猛スピードでこちらに突っ込んでくるではないか！ 自転車はぐんぐん近づいてくる頼斗は我に返り、急いで道の脇に寄った。が、急に動いたため足がもつれてしまい、思いつきこけてしまった。自転車はなんとか頼斗の横を通りすぎた。しかし、頼斗は人生

という坂から転げ落ちたというのに、さらに実際の坂からも転げ落ちることになった。頼斗はごろごろと坂道を転がり、下まで行った。自転車は坂からかなり離れたところでようやく止まった。女性は自転車から降り、急いで頼斗の元へ駆け寄ってきた。一方の頼斗は怒り心頭だった。文句を言ってやろうと思いい、立ち上がり、駆け寄ってくる女性をにらみつけた。しかし、頼斗と女性の距離が五メートルに迫ったとき、頼斗の表情が普段どおりになった。そして、女性が頼斗の目の前に来たときは、彼の怒りは世界の果てにでも飛んでいってしまったようだった。

頼斗から言わせれば、その女性は今まで見てきたどんな女よりも好みのタイプだった。明るい茶色に染まったセミロングの髪、ぷりつと、やわらかそうな頬、厚い唇、物憂げな目。頼斗はしばらくその女性に見とれていた。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

女性は、頼斗があまりにもぼけっ、としているので、頭を打ったものだと考えた。

「救急車を呼びましょうか？」

頼斗はこの言葉でようやく我に返った。

「えっ、いやぜんぜん大丈夫ですよ。ほらこの通り」そう言って頼斗はその場でぴょんぴょんと跳ねてみせた。

「お怪我はありませんか」それでもなお心配そうに訊ねた。

「ありませんよ、そんなもの」頼斗はにこやかに答えた。

「すいません。その、自転車のブレーキが壊れてしまったので、さつきはあんなことになったんです」女性は頭を下げた。

「僕はぜんぜん気にしてませんよ。ほら、お互いなんともなかったからいいじゃないですか」頼斗は大仰な身振り手振りで対応した。

「それにこんなかわいい方とお話ができてむしろうれしいですよ」

女性の頬がほのかに赤くなった。

「本当にすいませんでした。あの、私、買い物で頼まれていて、実は急いでるんです。もしよろしければこれで」

「いいですよ。どうぞ行ってください」

女性は最後にもう一度、謝罪の言葉を述べて自転車であつていった。頼斗はその後ろ姿を見つめていた。

頼斗が旅館に戻ると、ロビーで健二が見知らぬ中年男二人とテールブルを囲んで話をしていた。中年男の一人は背が低く、みことなるっぱげだ。体も丸みを帯びていて遠くから見ると、頭と体が見事な調和をとっていて、こっけいに見える。細い目の陽気なおじさんだった。もう一人のほうは、ひよろりと背が高く、角刈りでむつとりとした顔をしている。ほかの二人よりも幾分若いようだ。背が高いせいなのか、やせ身に見えるが、服の袖からのぞく手はこつこつしていて力強そうだった。

健二は頼斗の存在に気づいた。

「よう頼斗、帰ってきたか」ほかの二人が頼斗に顔を向けた。

「はい」ここで頼斗は言葉を切った。ほかの二人にもあいさつしておいたほうがいいだろうか。少し悩んだが頼斗が次に口を開くより先に、陽気な丸顔が話かけてきた。

「頼斗っていうのが君の名前か。えらいハイカラな名前だね。それに比べたら私の名前なんぞ江戸時代風の代物だよ。そうだと思いませんかケンさん」

「ああ、まったくだ。頼斗、紹介するわ。こいつらはわしのけつこ
うな友人でな、こっちのハゲが伊藤金助だ。いとうきんすけそれで、こっちの無愛
想なのが小山仁だ」こやまじん

「ほっほっほ、ハゲとはひどいですね」

金助は笑った。その様子を見て頼斗は感心した。本当にお互い信
頼しているから叔父はあんな暴言を吐けるんだと感じた。

それから頼斗もこの談笑の輪のなかに入った。といっても、もっぱら聞き役だった。年齢も一世代ほど違うこのグループの中では頼斗は萎縮しっぱなしであった。話を聞いているうちに頼斗がわかったことがいくつもあった。金助は陶芸家で、つばや皿を作っている

ということ。仁は健二とともに地元の猟友会に入っているということだった。頼斗はこのとき初めて健二が狩猟をしていること知った。「叔父さんって、猟友会にはいつてたんですか。ぜんぜん知りませんでしたよ」

「おおそうか。まあ言っただけでなかったかもしれないな。割と昔からやつてるんだが。お前はこういうことに興味がないから、話したことは一度もなかったかもな」

「そんな、少しくらい興味はありますよ」本当はぜんぜん興味などなかったのだが、頼斗には自分の意見を言うより、相手に合わせて会話をする悪癖があった。

「そうか！」健二の目が輝いた。これを見て頼斗はしまったなと思った。叔父の自慢話が始まる兆候だ。叔父の自慢話は長かった。ところが、そこへ助け舟が現れた。

「あら、頼斗君、今呼びに行こうとしたんですよ。夕食ができましたよ」由紀だった。

「わかりましたすぐ行きます」頼斗は助かったと思った。しかし、健二はそんな頼斗をつかまえて言った。

「特別に明日、わしのライフルを見せてやろう」満面の笑みだった。頼斗は逃げられないと悟った。

食堂はゆづに六人が囲える木製の長机が六つあり、一つのテーブルの周りには椅子が四つずつ置かれていた。頼斗が食堂に入ったとき、そこには先客がいた。食事をしているのでおそらく宿泊客だろうが、奇妙な男だった。黒くぼさつとした髪をして、薄い青のワイシャツ、上下に黒のスーツを着ていた。ネクタイはしていなかったが、旅館に滞在するにしてはわりとフォーマルな格好だ。食事をしていて男が顔を上げて頼斗を見た。頼斗は一瞬たじろいだ。その男の目に宿る水晶のような輝きが頼斗を圧倒したのだ。男は頼斗に軽く会釈をするとまた食べ始めた。頼斗も自分の席について用意されたメニューを食べた。

だが、料理を食べているうちにまたあの申し訳ないという気持ち

が湧いてきた。隣の男は客だ。つまりちゃんと自分で払った金で飯を食べている。ところが、自分はどうか。叔父夫婦の好意で食事でありつけているだけではないか。頼斗はまた憂鬱になった。それでもせつかく用意してくれた料理を残すのは二人に悪いと思ってすべてたிரáげた。頼斗は空になった食器類をじっと見つめた。せめて、せめて後片付けぐらいは自分でしよう。

頼斗はお盆を持ち、調理場まで足を運んだ。洗い場を覗いたとき、頼斗は仰天した。洗い場にも先客がいた。しかし、今度の先客は頼斗が知っている人物だった。

「君は！」頼斗は声が裏返った。

「まあ、昼間の人！」

女性も頼斗の登場に驚いた。彼女は自転車で頼斗をひきそうになった、あのときの女性だった。二人はしばらく突っ立って互いを見ていた。先に口を開いたのは頼斗だった。

「ど、どうして君がここに」頼斗の興奮はまだ収まっていなかった。

「わたしここで働いているんです」

「そうだったんですか」

「あの」頼斗がまた何か言おうとする。しかし、言葉が出てこない。彼は彼女の気を惹こうとして、何とかロマンチックな台詞でも言おうとしたが、次に出てきた言葉はひどく平凡で彼自信もびっくりしたくらいだ。「すごい偶然ですね」

頼斗は自分の冒険心のなさにがっかりした。

「そうですね」当然相手からの返事もありきたりなものとなった。

お互いぎくしゃくしているうちに、さっきに宿泊客がいつの間にかお盆を持って頼斗のうしろに来ていた。どうやら頼斗の行動を見て食べ終わった後の食器はここまで持つてくるシステムと勘違いしたようだ。

「あのー、これどうすればいいですか？」

「あっ、そのままにしておいてもらって結構だったんですけど」

「なんだ、そうだったんですか」そう言うと男は手近な場所にお盆

を置いた。

「ごちそうさま。今日の料理は君が作ったのかい？」

「ええ、菜の花のおひたしとさつま揚げは私が作りました。ほかの料理は女将さんが、私も少し手伝いましたけど」

「おいしかったよ」そう言うと男は去って行った。女性はうれしそうだった。

頼斗はしゃべりがうまい奴はいいなと嫉妬混じりで彼を羨んだ。

「ええっと、お名前は？」頼斗が嫉妬している間に今度は女性のほうから訊ねてきた。

「向田頼斗。実はここのご主人の甥っ子なんだ。君は、名前は何て言うの？」

「麻野美羽あさのみわです。ここには叔父さんに会いに来てるんですか？」

この質問に頼斗は困窮した。いろいろなわけがあつてここに来ていることを伝えるのは彼のプライドが許さなかった。

「ああ、そうだね」頼斗はうまい具合に受け流そうとしたがそうはいかなかった。

「でもいいんですか、仕事のほうは？　今は大型連休のシーズンじゃないですよ」

「うつ」急所を突かれた。もう正直に話すしかないようだ。

「仕事はね。会社が潰れて……二週間くらい前に」本当は半年前に倒産したのだが。

「まあ、ごめんなさい悪いこと聞いちゃいましたね」美羽は申し訳なさそうにわびた。

「大丈夫だよ。これから再就職活動を始めるところさ。僕はこう見えても前の会社では結構優秀な社員だったんだよ。次の職場なんてすぐに決まるさ」また嘘をついた。半年以上も不採用が続いているというのに。

「がんばってくださいね」美羽は応援してくれた。彼女の笑顔は実にチャーミングだった。

「うん、ありがとう。がんばるよ。それじゃあ、またね」

そう言っ て美羽と分かれると、 頼斗は上機嫌で自分の部屋まで戻った。 頼斗はここに来たばかりのときは、一週間もいることが耐えられないと思った。それが彼女の登場で一変した。 頼斗はこの一週間が楽しいものになるだろうと期待していた。

頼斗はまだこの予想がはずれることを知らなかった。

承の章：悲劇の幕開け

次の日、頼斗は前の晩に健二がほぼ無理やりとりつけた約束に付き合わされた。朝食を食べ終わってから、頼斗と健二は狩猟道具を保管してある小屋に向かっていた。その小屋は旅館の向かいに見えるあの新しくできた小屋だった。

「そうだ。銃を見たあとに、近くの湖で釣りでもしようか」健二が突然提案した。頼斗には釣りなどどうでもいいことであつた。しかし、ここでも叔父に合わせた。

「ああ、いいですね」

これで一日の半分の予定が決まった。

「この小屋はな」小屋の前に来たとき、健二がしゃべりだした。「七年くらい前に建てたもんなんだよ。おまえは知らないだろうな」

「何のために建てたんですか？」

「半分は物置にするため、もう半分は夫婦円満のためだ」

「え？　どういうことですか」

「おまえにはわからんだろうが、長い間夫婦で生活を続けると毎日が単調に感じてくるんだ。要するに慣れちゃつたな。それでそんなつまらん生活が続くとお互いにうんざりしてくるだろ。それでわしは変化を求めたわけだ。今は一週間に一回か二回はここで一人で趣味に没頭しとる。プラモデルを作つとるんだ。戦車とか戦闘機とか。向こうじゃあ、夜遅くまでやつとると、かあちゃんがうるさいからな」そう言いながら鍵をはずし、ドアノブに手をかけた。「それに比べてここは自由に……うっ、なんだ、この臭いは？」

ドアを開けて中に一步入ると健二は顔をしかめた。頼斗も同様にこの臭いに嫌悪感を感じた。それは腐った生ごみのような臭いだつた。健二と頼斗は臭いの原因を突き止めるために、小屋の中を搜索した。一番臭いのきつい部屋がシンクの流し台がある部屋だった。健二と頼斗はこの流し台の排水口にネズミの屍骸を発見した。これ

が悪臭の正体だった。

「きつと排水口から上ってきたんですね」

「まったく、死ぬならほかで死にやがれ」健二はネズミの尻尾を持ち、ひよいとつまみあげると窓から外へ投げ捨てた。

喚気のために、健二は小屋じゅうの窓を全開にし、さらに入り口のドアも開け放った。

「これでしばらくすると臭いは消えるだろ」

悪臭騒動もなくなったところで、頼斗は改めてこの小屋の内部を観察した。主な部屋は三つあり、それぞれの部屋にはカーテンつきの窓が一つずつ取り付けられていた。一つは外へ通じるドアがある部屋だ。この部屋が最も広く、入り口のドアから見て、部屋の奥側の右四隅にはプラモデルをつくるための作業用の机、左四隅に本棚が置かれていた。この本棚には、上から二段目と三段目に狩猟の本や麻雀の打ち方といった本や娯楽小説が収められているだけで、その他の段には何も入っていないかった。部屋の端にはまだ手付かずのプラモデルと古新聞が積まれていた。部屋と部屋を隔てるドアはないたため、この部屋にいただけで他の二つの部屋の様子を伺うことができた。入り口のドアから見て、右側の部屋が寝室、奥側の部屋が流し台とトイレがある部屋であった。寝室は物が少なく、ベッドと大きな収納タンス以外何もなかった。流し台の部屋は寝室よりは物が充実していた。壁には時計がかけられていたし、流し台の横には小型の冷蔵庫が置かれていて、冷蔵庫の向かいにはガラス戸の棚があった。棚の中には平皿が二枚、グラスが四個、あとはウイスキーやブランデーなどの酒類がたくさん入っていた。部屋の真ん中にはテーブルがあり、その周りに背もたれのない椅子が三脚置かれていた。この部屋は三つの部屋の中でも一番小さいのだが、こんなに家具類が入れているので少々動きづらかった。部屋の左右にドアが一つずつ取り付けられており、右はトイレ、左は物置に通じていた。

「こつちだ」健二は頼斗を物置の前まで案内した。

物置のドアには鍵がかけられていた。健二はポケットから鍵を取り出し、物置を開けた。健二は中から狩猟道具一式を取り出して頼斗に見せた。そして健二はこの銃のすばらしさについて語りだしたが、頼斗は銃の知識がそれほどないので、長くて重そうな銃だという印象しかもてなかった。

「持ってみろ、なに、心配いらん。弾は入つとらんぞ」

その銃は頼斗の予想通りずっしりと重かった。銃自体の長さは頼斗の身長を半分を超えている。自分にはとても扱えない代物だと頼斗は感じた。これでイノシシをしとめようとしても、狙いをつける前に自分がイノシシにぶちのめされてしまうだろう。

頼斗が猟銃を返すと、健二は木箱の中から銃弾を取り出した。

「こつやって銃にこめるんだ」そう言うと健二は実際に銃弾をライフルに込めはじめた。

この瞬間から頼斗にとって叔父の持っている猟銃がただの鉄の筒ではなく、危険な道具に変わった。自然と体が半歩さがる。健二にしてみれば、実演してライフルの仕組みを簡単に説明しているだけなのだが、頼斗を縮みあがらせたただけだった。

「それで、こいつをこつやってかまえるんだ」

硬くなった頼斗には気づかず、健二は説明を続けた。

「そして、焦らず、獲物が十分しとめられるところにきたら……撃つ！」

頼斗には叔父が実際に発砲するのではないかとひやひやしていたが、当然そんなことはなかった。健二はただ口で、ズドン！と言っただけだった。

「という具合でやるんだよ」健二は満面の笑みで頼斗を見た。

頼斗は何か言わなければと思い、一番最初に頭の中に浮かんだ、ごくありきたりの質問を健二に言った。

「今までにどんな獲物をしとめたんですか？」

これが間違いだった。この言葉を聞いた瞬間、健二の目が輝いた。「よく聞いてくれた。わしが狙う獲物はいつも大物だ。熊や猪、こ

ういう危険な動物と対峙したことも何度も経験したわい」叔父は実にうれしそうに自分のかつての栄光を話し出した。話は延々と続いた。頼斗は途中で、「なるほど」とか「それはすごい」とか「信じられない」などと言った感嘆する言葉を連発しつつ、早く話が終わることを願った。

「それでわしは狙いを定めて撃った。それは見事に巨大猪に命中して、やつはその場に倒れた。そこまでは今までと同じだ。だが、次に起きたことはわしの予想していないものだった。わしがそいつに近づくと、なんとやつが起き上がって俺に突進してきたんだよ！信じられるか？俺も予期せぬ出来事に一瞬だけたじろいだ。でもな、次の瞬間俺はほとんど反射的に銃を持ち直して両手で銃身握りしめたんだ。それで、向かってくる猪の頭めがけて銃を振り下ろした。銃床が猪の頭にこれまた見事に命中して、脳天をかち割ってやったわけよ。猪はそこで動かなくなった。つまりな、俺は本来撃つてしとめる道具を鈍器として使って、見事に獲物をしとめたわけだ。俺にとっては銃は手足のようなもんだ。どうにでも扱える。それを証明する話があつてな、これがまたすごい……おや！もうこんな時間か」叔父は壁にかけてある時計を見て初めて、自分が延々と長話をしていることに気づいたようだ。もう、三十分以上も話していた。

「昼頃になると魚の食いつきが悪くなるからな。さっさと行くぞ」頼斗はなぜか急かされた。遅れたのは自分のせいだと言うのに。

健二はライフルと銃弾をそのまま急いしまった。

「それじゃあ行くか。餌は途中で買うぞ」そう言つて叔父は物置の中にあつた釣具を二セット持って、物置に鍵をかけてから小屋の外に出た。窓と入り口は開けたままだった。

叔父が小屋の戸締りもせずに出かけるので頼斗はびっくりした。

「ねえ、叔父さんドアも窓も開けっ放しじゃないか」

「開けとかんと臭いが消えんだろ。それに、ここらで泥棒の心配するやつはおらんわ」

「でも、銃が」

「銃をしまつてゐる部屋にはちゃんと鍵はかけたる。それだけで十分だ」

これに頼斗は戸惑つたが、頼斗はこの土地の人間である叔父にしたがつてこれ以上口を出さなかつた。しかし、開っぱなしだと虫が入ってくるだろうにと、頼斗は思った。

湖はきれいな場所だつた。水はきれいに澄み、浅いところなら水底を眺めることができた。周りには草木が生え、水中から顔を覗かせる植物もあつた。健二は半ズボンにサンダルという格好だつたので湖の浅い部分になんのためらいもなく入ってから、釣りを始めた。頼斗は岸から糸をたらした。釣りを始めると二人とも黙つてしまつた。二人ともただじつと自分の竿先を見て、魚が餌にばくついていくかどうかを確認していた。

「何が釣れるんですか？」頼斗が沈黙を破つた。

「まあ、いろいろ」健二が短く返事をした。

「なあ」今度は健二が口を開いた。「おまえ、今仕事探してんだろ」この話題はなるべく出てほしくなかつた。頼斗は心が締め付けられるような思いがした。

「はい、そうです」力なく答える。

「あのさ、うちの旅館を継ぐ気はないか？」

「えっ？」頼斗は最初聞き間違いをしたかと思つた。いきなり叔父がこんなことをいいだすのが信じられなかつた。叔父はなぜ自分にこんな話を持ちかけてくるのだ。

「ど、どういふことですか？」自然と声に困惑の色が混じる。

「わしももう歳だ。後数年で隠居しようと思つてゐる。だが、あの旅館を閉じるのは少し寂しい。あそこはわしとかあちゃんが二人でやってきた場所だ。思い出も愛着もある。そんな旅館を自分の手で終わらせるには抵抗がある。せめてわしが生きている間はあの旅館は続いてほしいんだ。」

だから、あとをついでくれる者がほしい。あいにく、うちのせがれは広島に行つて家庭をもつた。あいつはもうあそこに根を下ろしたんだ。いまさらこっちには戻らんだろう。そんなときに、ちょうどお前がこっちにくると言う話を聞いた。仕事が見つからずに苦しんでいるということも聞いた。お前はわしの甥っこだ。小さい頃から良く見てきたが、わしはお前はこの仕事に向いてると思つとる。お前は真面目だし、威張り散らすところもないし、相手の調子に合わせるのがうまい。わしの仕事の手伝いから始めてだんだんと仕事を覚えてくれればいい。もちろん、強制はしない。お前がよければの話だ」

あれだけ探していた仕事が今日の前に、手が届くことにぶら下がっているのだ。何もしないでものすごいチャンスが転がり込んだが……頼斗は視線を下に落とした。

「せっかくの提案なんだけど、断ります。僕はもつとやりがいのある仕事がしたいんだ」

頼斗はこの発言を後悔した。今のは遠まわしに旅館経営なんてやりがいのない仕事だと言つたようなものだ。頼斗は急いで補足した。「僕は、店を経営するよりも、ものをつくる仕事がやりたいんです。社会の役に立つような製品を作つて世の中に広める。そういうことをしたいんです。だから、その……旅館の経営つていうのは、僕がやりたいと思つていることとは少し違うんです」

頼斗はこんなことを言うのがつらかった。叔父の願いを断つたことで叔父が悲しむのがわかりきつていた。期待を裏切られた叔父はどんな顔をしているのだろう。頼斗はおそろおそろ視線を上げた。

しかし、意外なことに叔父はそれほど落胆しているようには見えなかった。眉はやや下がつていたが口元は微笑んでいるように見えた。やれやれ、というような顔をしていた。

「まあ、お前の人生だ。わしがあれこれ口出しすることではないな」
健二は小さく息を吐いた。

「だが、これだけは覚えておいてくれ。道はひとつだけではない、

とな」

これだけ言うと健二は再び釣りに集中した。釣りは十二時頃まで続いた。叔父は二ゴイを二匹釣りあげた。頼斗はぼうずだった。

旅館へと戻った二人は昼食を食べたあと、この日始めての別行動をした。健二は再びどこかへと出かけた。頼斗は自分の部屋にこもり、寝転んで家から持ってきた本を読んだ。だが、本を読んでいる間も、頼斗の頭には叔父の言葉がこびりついて離れなかった。叔父の言葉が頭に浮かんでくるたびに、頼斗は「あれでよかったんだ」と自分に言い聞かせた。

その日も日差しの暖かい陽気な日だった。頼斗はしだいに心地よくなり、いつの間にか本を開けたまま眠ってしまった。

誰かが頼斗の部屋のドアをノックした。

「頼斗君、夕食の準備ができたわよ」由紀の言葉で頼斗は眠りから覚めた。頼斗は時計を見た。四時間も眠っていたのだ。一日を損した気分を抑えつつ頼斗は食堂へと向かった。

夕食には、健二が昼間に釣った二ゴイが味噌汁の具となって登場していた。頼斗は夕食を食べ終わると、昨日と同じように食器を片付けに、洗い場まで行った。頼斗は美羽がいることを期待していた。しかし、そこにいたのは由紀だった。

「おや、食べ終わったのかい？ ああ、食器を持ってきてくれたのかい」

「あの、美羽さんは？」頼斗はおずおずと尋ねた。

「ああ、あの子は、今日は休みよ」この言葉に頼斗はがっかりした。「どこか悪いんですか？」

「いえ、ただの定休日よ。ははあん、頼斗君、あの子のこと気になってるのね」頼斗の露骨過ぎる反応に、由紀は思わずにやにやしてしまった。「わかるわよ。あの子かわいいものね。私の若い頃には負けるでしょうけど、おほほほ」

由紀の若かりし頃は関係なく、頼斗は赤面してしまった。

「うつ、いや、あの……ごちそうさまでした。おいしかったです」
頼斗はそう言うのと調理場から足早に去っていった。
「若いわねえ」由紀はにやけながらつぶやいた。

頼斗は部屋に戻った。はつきり言っていることがなかった。頼斗はテレビをつけて時間を浪費することに決めた。頼斗は大して面白くもないバラエティ番組を二時間ほど見ていた。番組を見終わった頃にはのどが渴いていた。時計を見た。九時十分、食堂で何か飲み物をもらおうと思い、頼斗は部屋を出て一階に下りた。

食堂は騒がしかった。一つのテーブルを四人の男たちが囲って、酒を飲んでいたのだ。頼斗は全員に見覚えがあった。健二に金助、それと仁、どういいうわけか昨日食堂にいた男も一緒に混じっていた。健二が頼斗に気づいて声をかけた。

「おう、頼斗！ おまえも飲め」いきなりの命令口調だ。顔も赤くなっているし、健二はいい感じにできあがっているようだった。

「あ、はい」頼斗はほかの椅子をひとつ持って、健二たちのテーブルに加わった。

「こいつはわしの甥っ子なんですよ、お客さん」健二は向かいに座っている客人に話した。

「そうだったんですか」男の反応は薄かった。

「向田頼斗です」頼斗は男に挨拶した。

「頼斗君ね。私は岩家雅貴いわやまさきといいます」雅貴は自己紹介をした。この場では、二人ともこれ以上言葉を交わすことはなかった。

話の主導権はもっぱら健二が握っていた。健二はおなじみの自慢話をみんなに披露した。ほとんど頼斗にとってはどうでもいい話だった。そんな話が続いた。

「それでわしは野良仕事の道具を片付けに納屋まで戻った。そこまではないな。それで道具を全部しまつて外に出ようとしたときにだな。なんと目の前に蛇がいたんだよ。種類はわからなかったが、これくらい」そういつて健二は両腕をめいっばい広げて見せた。さ

すがにそれは誇張だろうと、頼斗は思った。「こんな馬鹿でかい蛇が急に目の前に現れたら、並の人間ならすぐに逃げ出すだろうよ。だが、わしは違った。蛇をそのまま納屋の中に放置しておくわけにはいかんからな。わしはすぐ横に立てかけていたクワを持って、蛇とにらみ合った。わしはクワを蛇の首根っこに押し付けてやつ動きを封じた。そして、空いてるほうの手でやつ頭を掴み、あとはわかる通り」何がわかるんだと、頼斗は心でつつこみを入れた。「疾風のごとき速さで外に出て、近くの川に向かって思いっきり蛇を投げ飛ばしたんだ。蛇は着水してどっかに行った。わしは勇敢に戦って勝ったのだ」

誇らしげに語る健二は尻目に、頼斗はほかの人たちの様子を伺った。金助は実におもしろい話だといわんばかりに笑っていた。しかし、その顔は真っ赤になり、表情もどことなくとろんとしていた。どうやら酒がそうさせているようだ。仁はというと、ちびちびと酒を飲んでいた。健二の話は半分も聞いていないだろう。雅貴は、健二の話にしっかりと耳を傾けているようだった。こんな話を聞き入るとは物好きな人だと、頼斗は思った。そう考えている間も健二の話は続いた。

「これはわしが狩りに行ったときの話だ。わしは巨大な猪を見つけたんだ。やつはまだわしに気づいてはいなかった。それでわしは狙いを定めて撃った。それは見事に巨大猪に命中して、やつはその場に倒れた」これを聞いているうちに、頼斗はおやつと思った。「そこまでは今までと同じだ。だが、次に起きたことはわしの予想していないものだった。わしがそいつに近づくと、なんとやつが起き上がった。俺に突進してきたんだよ！」頼斗は悟った。今朝、叔父の小屋で聞いた話とまったく同じだ。当然話の落ちも同じだった。叔父が銃床で猪を殴り殺したというところで話は終わった。

頼斗は改めて気づいた。健二が同じ話を何回もしているのなら、金助と仁は何十回、何百回と同じことを繰り返し聞かされているのだろう。頼斗は二人に同情した。

しかし、雅貴は違った。彼は健二の話に興味津々という感じだ。「銃床というと、銃を構えるときに手にする部分ですよ。そんなところで叩いたりして、銃が壊れないんですか？」

「心配いらん。銃は壊れんし、銃床も割れることはなかった」

「しかし、本来の用途とは別の方法で獲物をしとめるとはおもしろいですね」

「わしにとつて、もはやライフルは手足のようなものだから、はっはっは」健二は雅貴の言葉に気をよくしたのか、豪快に笑った。

そのとき由紀が食堂に現れた。

「まあ、まだ飲んでらしたの？ 明日は仁さんと狩猟に行くとか言ってますでした？ これ以上は明日に響きますよ」

「うるさい、自分の管理くらい自分でできるわい」健二は言い放った。

由紀は無駄だと悟り、食堂から出て行った。健二は由紀がいなくなっただけから口を開いた。

「やれやれ、これ以上はここでおちおち酒も飲めんな。どうだ、みんなこれからわしの小屋で飲みなおさんか？」

この提案には金助と仁の二人だけが賛成した。頼斗と雅貴は、ここで飲み会から抜けることにした。二人は片づけを手伝ってから、二階へと上がった。

頼斗は部屋に戻るとすぐに布団をしいて、その上に倒れこんだ。アルコールが体中をめぐり、頼斗をまどろみの世界へといざなった。どのくらいの時間が経っただろうか。頼斗は不意に目を覚ました。自分でもなぜ目を覚ましたのかがぼんやりとわかった。頼斗は音を聞いた気がしたのだ。遠くのほうで何かがはじけるような、そんな音を聞いた気がした。手元を探り携帯電話を探し当てる。時刻を確認した。夜中の零時五十分だった。頼斗はさっき聞いたと思える音考えた。しかし、考えれば考えるほど、耳に残る音があいまいになってきて、気のせいだったかもしれないという考えが思考の大半を占めた。最終的に頼斗は、音のことなどどうでもよくなった。そ

んなことを思っているうちに、頼斗は再び眠気に飲まれていった。

頼斗が目を覚めたのは六時半だった。昨日の酒が残っているのか、頭がずきずきと痛んだ。それでも布団から這い出て、一階へと向かった。今日は美羽がいるはずだ。

ロビーでは雅貴が椅子に座って新聞を読んでいた。頼斗が雅貴の姿を認めた直後に、美羽が右側の通路から現れた。頼斗は階段を小走りで下り、美羽に挨拶した。

「おはようございます。美羽さん」

「あら、頼斗さん。おはようございます。女将さんから聞きましたよ。昨日はみなさんで盛り上がっていたそうじゃないですか」

「いや、盛り上がっていたのは叔父さんだけだったんですけどね。」

叔父さんは自分の話ばかりに集中しているから、聞き続けている他の人は結構しんどいですよ」

「健二さんは悪気があってやってるわけではないんですよ。ただ少し他人からすごい人だと思われたいただけなんです」

「その欠点があれば愉快な人なんだけどなあ」

「欠点のない人なんていませんよ」

そのとき、外から仁が入ってきた。仁は猟銃を背負い、厚手のジヤケットとズボンを着ていた。もともと険しい顔が今はいつそう険しく見えた。

「ケンさんがこっちに来てないか？」仁は入ってくるなりそう言った。

「いえ、今朝はまだ見てませんけど。どうかされたのですか？」と美羽。雅貴も新聞を下ろして顔をのぞかせた。

「今朝、ケンさんと一緒に狩りをする約束をしてたんだが、時間になっても待ち合わせ場所に来なかったんだ。昨日小屋で飲んだあと、ケンさんは小屋に泊まると言ってた。それで小屋に行ってみたら、鍵が掛かっていて、呼びかけても反応がなかったんだ。だからこっちに來てるものかと」

「みんなして一体どうしたんだい？」食堂に続く通路から由紀が現れて仁の話を遮った。

「由紀おばさん。叔父さんがここにいない？」

「あの人なら昨日、食堂で見たきりよ。またあの小屋で寝てるんじゃないの？」

「小屋はもう見てきました」と仁が言う。

頼斗は落ち着かない気持ちで言った。「小屋の窓から中は見ましたか？」

「いや、カーテンが閉まってた。ケンさんはいつもカーテンを閉めてるんだ」

これ以上ここでうだうだと話を続けてもなににもならなかった。頼斗と仁と雅貴が小屋を見に行くことになった。由紀もついて行くとしたが、仁に止められた。結局、由紀は美羽と一緒に、落ち着かない様子で三人を見送った。

小屋の周りは不気味なほど静まりかえっていた。仁の言っていた通り、入り口には鍵が掛かって、窓はすべてカーテンが閉まっていた。頼斗たちは窓から中に入ろうとしたが、どの窓にも鍵が掛かっていて、突入はできなかった。三人は再び入り口に集まった。

「窓を割りましょう」雅貴が提案した。

仁はうなずき、猟銃で入り口横の窓を叩きわった。仁はそこから窓の鍵をはずして、窓を開き、視界を遮断しているカーテンを押し開けた。

頼斗は仁のすぐ後ろでその様子をじつと見ていた。そして、カーテンが開かれた瞬間、頼斗は現れた光景に全身の毛が逆立ち、全身の血が凍るのを感じた。頼斗にとってその光景はあまりに現実離れた、驚愕せざるをえないものだった。

「なんてことだ」仁が愕然としてつぶやいた。

部屋の中央に健二は仰向けに倒れて、事切れていた。彼の胸は乾いた血で染められ、おぞましい傷口が覗いていた。そのすぐそばには健二が昨日、頼斗に自慢していた猟銃が落ちていた。

転の章：岩家、密室に挑む

「ケンさん！」血相を変えて、仁が窓を乗り越え、健二に近寄ろうとした。

「待つて！ 触らないで！」雅貴が叫んだ。

仁はびくりと体をこわばらせて立ち止まった。雅貴がすぐあとに続いて中に入った。思考の止まった頼斗もよたよたと中に入った。

「昨晚まで元気だったのに」消えそうな声で仁が言った。「あのあと、俺とケンさんと金助でここで飲んだ。なのに……」仁は黙った。これ以上声が出てこなかった。

「とにかく、警察を呼びましょう」雅貴が提案した。仁が旅館に戻って警察に連絡をするようになった。雅貴と頼斗はこの場に残り、死体を見守ることにした。

仁はドアの鍵を外し、旅館へと走った。頼斗はまだ呆然としたままだった。その視線は床の上をさまよっていた。床には、おそらく健二が撃たれたときに飛び散ったと思われる乾いた血の斑点がいくつも付いていた。頼斗の視線はゆっくりと健二のほうへと向かっていった。胸には痛々しい傷があった。そこから流れ出た血は叔父の体と服を汚し、床にとどいていた。健二の顔からは精気が完全に消え去っていた。顔は白くなり、口は歯が見える程度に開いていた。

頼斗はそんな叔父のうつろな顔をこれ以上見たくなかった。頼斗は叔父のそばにしゃがみ、そつと健二の目を閉じた。雅貴がその行為を止めることはなかった。ただ鎮痛な面持ちでそれを見守った。

頼斗は黙って立ち上がり、小屋に入ってから始めて口をきいた。

「叔父は、どうして亡くなったのでしょうか？」魂を抜かれた者の声だった。

「自殺ではないね」雅貴は断言した。そして、床に転がっている猟銃を指差した。「ライフルが長すぎる。この銃では自分で自分の胸を撃つのは無理だろう」

「じゃあ、殺されたと」頼斗は震えた。

「その机の上にある鍵は小屋の鍵かな？」ますます不安になる頼斗を尻目に、雅貴は訊ねた。机の上には弾の入っている箱といくつかの細々とした品がのっており、その中に雅貴の言った鍵もあった。頼斗はその鍵のキーホルダーに見覚えがあった。昨日、健二が小屋を開けるときに使った鍵だ。

「そうです。この鍵です」

「じゃあ、事件というわけでもないね。私たちはここに入るためにガラスを割ったんだよ。もしこれが殺人なら、犯人はどうやって外に出たんだい。おそらくこれは事故だと」ここで急に雅貴の口が止まった。雅貴は床のある一点を見つめ、顔に驚きを浮かべていた。

雅貴はその場所に近づき腰を下ろした。頼斗は雅貴の行動を見て、叔父の死による不安とは別の、得体の知れない不安が胸に広まった。頼斗は雅貴のそばまで行き、訊ねた。

「何をしてるんですか？」

「これを見るんだ」

雅貴が見ていたもの、それは床に付いた血であった。しかし、他のくつきりとした血の斑点とは違い、何かでこすられ、滑らかな筋状にのばされていた。

「これがどうかしましたか？」

「わからないか？ 他の血は斑点状で固まっているが、これは血がのばされて固まっている。これはまだ血がぬれているうちに何かでこすれて、こんな風に固まったんだと思う。当然、自然とこんな風に固まるなんてありえない。何かに触れたからこうなったんだ」

説明が進むにつれて、頼斗にもこの血痕の重大性が理解できた。

頼斗の顔から血が引いていった。

「つまり、健二さんが亡くなったときに、誰かがこの部屋にいたことになる。この血はその人物が触れたために、のばされて固まったんだろう。そして、その人物が健二さんを撃った可能性が限りなく高い」

殺人。頼斗の頭にこの二文字が焼きつき離れなくなった。そして、頼斗はこの殺人の怪奇極まる点を口に出した。

「じゃあ、叔父を殺したやつがいたなら、そいつはどうやってここから出たんです？」

雅貴は首を振った。

「わからない」

しばらくして仁が警察を連れて戻ってきた。頼斗たちは警察からここへ来てから、死体を発見するまでの状況をあれこれ訊ねられた。このとき頼斗は妙なものを見た。この聴取を担当した坂本警部は雅貴の顔を見ると驚きの表情を見せたのだ。警部はすぐに気を取り直して話を聞きはじめたが頼斗には不思議な光景に見えた。

聴取は淡々と進んだ。三人は、ここへ来たときはドアと窓にはすべて鍵が掛かっていたこと、自分たちは窓を割って中に入ったこと、ドアの鍵は警察を呼びに行くときに中から外したこと、むやみに部屋の中のものに触ったり、死体を動かしていないことを説明した。ここが密室であつたことに担当の警部は明らかに顔をしかめたが、三人に指紋を提出させただけで、三人を解放した。三人は旅館へ戻ることにした。その帰り道では、頼斗と雅貴が並んで、仁はその数メートル先を一人で歩いた。途中で雅貴は頼斗に話しかけた。

「頼斗君、この事件の最も不可解な点は何だと思う？」

「密室から犯人が消えたことです」

「違うんだよ。犯人は密室を作るだけの知恵を持っていた。なのに、なぜ自殺に見せかけた殺し方をしなかったのか。あの猟銃を使ったのは明らかにまずかった。そのうち警察も殺人事件として捜査に乗り出してくるだろう。これが毒殺だったなら、この事件は確実に自殺として処理されていただろうね」

主を亡くした《深緑荘》には悲壮な空気が漂っていた。ロビーでは由紀がハンカチに顔をうずめて狂わんばかりに泣いていた。隣には美羽が座り、夫を亡くした妻を必死になだめていた。ただし、彼

女の目も真っ赤になっていた。

この様子を見て、雅貴はこの場を取り仕切った。

「何か度数の強いお酒はありませんか、それをお湯で割って飲ませてあげてください」

雅貴がそう言うと、仁が食堂まで走り、焼酎のお湯割りを作って戻ってきた。

「飲んでください。落ち着きますよ」

由紀は進められるがままグラスに口をつけ、一口すすった。グラスの中身が半分になる頃には、由紀の状態もいくらか改善し、呼吸も落ち着いてきた。

「あの人が死んだなんて信じられません。ううつ、どうして、あの人が死なないといけないんですか」由紀は誰に語りかけるわけでもなく、涙声でしゃくりあげながら言った。

「私も信じられんよ。昨晚、あの小屋から出たときはぴんぴんしていたというのに」

「金助さんも一緒に帰ったんですか？」頼斗が訊ねた。

「ああ、彼と一緒に帰った。ことが起きたのはそのあとだろう」

「金助さんにもこのことを伝えたほうがいいと思います。彼も警察から話を聞かれる立場にいますから、先に知らせておいたほうが心の準備をする時間もあるでしょう」

雅貴の提案を受けて、仁が立ち上がった。

「わかった。そうしておこう。また、電話借りますよ」そう言うと、仁は席を外した。

仁はしばらくして戻ってきた。どうやら金助もこちらに来るらしい。

そして、二十分後に金助は姿を現した。その様子は明らかに狼狽していた。

「いったいどういうことですか？ どうしてケンさんが亡くなったんです？」

仁が手短に、鍵の掛かった小屋の中で健二が胸に弾丸をうけて死

んでいたことを伝えた。

「しかし、どうして猟銃がああの部屋にあったんだ？」仁の話を聞き終わると金助が言った。

「猟銃だけじゃない。あそこには狩猟道具一式がそろっていた。おそらく俺たちが帰ったあとに今日行くはずだった狩りの準備をしていたんだろう」と仁が言う。

仁のこの言葉を聞いて、頼斗は忘れかけていたあることを頭のてっぺんまで引きずり出した。頼斗は昨日の真夜中に布団の中で何かはじけるような音を聞いていた。あれは銃声だったのではないかと、頼斗の中でそんな疑念が一気に膨らみはじめた。頼斗はそのことを口に出そうとしたが、玄関のドアが開かれたことで機会を失った。

坂本警部が二人の部下を引き連れロビーに入ってきた。

「向田健二さんの奥さんはこちらにいますか？」

「私がそうです」由紀がおそろおそろ手をあげた。

「ご主人について二、三質問をしたいのですがよろしいですか？」由紀は黙ってうなずいた。警部はメモ帳を取り出し、質問を始めた。

「健二さんは何か悩み事を抱えていませんか？例えば病気とか」

「そ、そんなものはありませんでした」

「お金に困っていませんか？借金とか、そんな問題はなかったのですか？」

「主人は借金などしたことありません。ここの経営もそれなりにうまくいっていますし、主人には悩みなんてありませんでした」

「そうですか」メモ帳に何か書き込んだ。そして、次にとんでもない質問をした。

「それでは、健二さんが誰かに恨まれるようなことはありませんでしたか？」

この質問に、由紀は目を大きく見開いて、肩を震わせた。

「そんな、そんなことは絶対ありません！」由紀は激しく否定した。

「刑事さんは、あの人が誰かに殺されたとも思っているのですか？」逆に由紀が質問をした。

二人のやり取りに、辺りの空気がざわついてきた。

「どうなんですか？ 刑事さん」由紀がしつこく食い下がるので、警部も折れた。

「鑑識の話によると、弾丸は被害者の胸から三十センチから四十センチ離れた場所から発射されたそうです。銃身の長いライフルで自殺を図るとなると、銃口と体を密着させないと引き金を引くのは難しいです。つまり、自分で自分を撃った可能性よりも、何者かに撃たれた可能性のほうが遥かに高いのです。それとも一つ、健二さんが亡くなったときに部屋の中に何者かがいた痕跡がありました」

この報告に由紀は唇をぶるぶると震わせ今にも失神するのではないかというほど、目つきが異常になった。他のものも動揺を隠せない様子であった。ただ一人、雅貴だけが落ち着いた様子で座っていた。

「ありえない」仁が反論した。「ケンさんは誰にも恨まれるような人ではなかった」

「ええ、そうですよ」金助も加勢する。

警部はここで被害者の人望について議論するつもりはさらさらないらしく、由紀がひどく取り乱している様子を見て、由紀が落ち着いてからまた話を伺うことにする、と言い残して去っていった。

「まったく、とんでもないことになりましたね。ケンさんが亡くなったと思ったら、今度は殺人だなんて」金助が疲れた様子で言った。「警察は勘違いをしている。ケンさんを殺そうとするやつがいるはずない。これはきつと事故だ。何かの理由で銃が暴発したんだ」これが仁の意見だった。

この言葉を聞いて頼斗は言いかけて、言えなかったことを話し始めた。

「あの、実は僕、昨日の夜、布団の中で銃声のような音を聞いたんですよ」

全員の目が頼斗の方を向いた。すぐさま雅貴が雨のように質問をあげた。

「銃声だつて？ それは本当かい？」

「はい。いや、でも銃声かどうかははっきりとわからないです」

「どんな音だつた？」

「何かが破裂するような音でした」

「それは何時ごろの話だい？」

「えっと、時計を見たんですよ。そのときは零時五十分くらいだつたと思います」

「零時五十分！ 私たちが小屋を出てから三十分もたつてないよ」
金助は仰天した。

「お二人は昨晚、健二さんと一緒に飲み会を続けていたのですよね？」
雅貴が訊ねる。

「ええ、そうですよ」

「お二人が小屋から帰られたのは何時ごろでしたか？」

「零時二十七、八分くらいだ。確かそのくらいだったはずだ」
仁が答える。

話を整理すると、頼斗の聞いた音が本当に銃声だったならば、金助と仁が帰ってから、およそ二十分後に凶行が行われたことになる。話が落ち着いてきたところで、ここの集まりも自然と解散していった。仁と金助は自宅に戻った。由紀は美羽に付き添われて自分の部屋に向かった。雅貴は外の空気を吸つてくると言つて出ていった。頼斗は気になることがあつたので、雅貴のあとを追った。

「あの、雅貴さん」
頼斗は旅館の前をうろろろしている雅貴に話しかけた。「あなたは何者なんですか？ こんな状況で落ち着いていられるなんて普通じゃ無理です。それに警察の人があなたを見たとき、なんだか驚いてました。知り合いなんですか？」

雅貴は立ち止まって頼斗を見た。

「なかなか細かいところを見てるじゃないか。質問に答えると、私は探偵をやっている」

「浮気調査とかするあの探偵ですか？」

「日本の探偵といたらそんなものだが、私の場合はそれだけじゃない。私は犯罪捜査コンサルタントの資格を持つ探偵だ」

「犯罪捜査コンサルタント？」聞きなれない言葉に頼斗は眉をひそめた。

「犯罪捜査コンサルタントとは、日本がアメリカの捜査法にならって制定された国家資格だ。この資格は、犯罪学に精通していて、生物学、化学、心理学の分野で高い知識を持つものに与えられる。そしてこの資格を持つものは、警察からの要請があれば、警察と協力して捜査にあたることができる」

「すごい資格じゃないですか！」頼斗は雅貴が推理小説の中に出てくる名探偵のような存在に思えてきた。

「全然。警察の科学捜査が目覚ましい発展を遂げたから、警察が手を焼く事件はほとんどなくなってしまった。それと同時にこの資格にもそれほど価値がなくなっただよ」

「でも、あの刑事さんは岩家さんのことを知ってたみたいですよ。」

岩家さんは過去に警察に協力したことがあるんですよ」

「ほんの二回だけさ。実績と信頼はほとんどないに等しいよ」

「でも資格はあるんですよ。岩家さんはこの事件を調べないんですか」この時点で頼斗は雅貴に期待を抱いていた。

「話聞いてた？ 私は警察から要請がない限り勝手なことはいんないんだよ」

「もうすぐ警察の人が頼みに来るかもしれないじゃないですか」

「ない、ない。警察にもメンツがある。どうしようもない限り、私のところにはやってこないよ」

「僕は警察がこの事件を解決できるとは思いません。警察も密室殺人なんて扱ったことはないですよ」頼斗はきっぱりと言った。

「私もない」当然の答えであった。

「それでも、岩家さんはやってくれそうな気がします。そんなオラが出てます」

「適当で、うれしいことを言うね。まあ、確かにこの事件には結構な興味を持つてるよ。頭の中で考えるくらいなら、警察も文句は言わないだろう」

頼斗はこの言葉を聞いてうれしくなった。しかし、それもすぐ落ち込んでしまった。

「しかし、時間がないな。明後日には帰らなきゃいけないからなあ」「えっ、そんな、明後日にチェックアウトするんですか？」

「うん。そうだよ」

「もう少しいてくれもいいじゃないですか」

「だめだ、だめだ。その次の日が結婚記念日なんだ。すっぽかすわけにはいかん」

この答えに頼斗はある種の脱力感を覚えた。

「家庭のある人間には、家庭のある人間の事情があるんだ。とにかく時間が惜しい、早速だけど君に聞きたいことがあるんだ」

「ああ、はい。どうぞ」

「昨日一日の健二さんの行動が知りたい。君の知っている範囲で、健二さんが、いつ、どこで、何をやったのかをできるだけ詳しく話してくれないか」

頼斗はゆっくりと昨日のことを思い返した。

「昨日は朝の九時ごろに叔父さんと一緒に小屋までいきました」

「そこで何をしてたんだい？」

「叔父さんの猟銃を見せてもらっただけです。小屋の中に鍵の掛かった物置があつて、叔父さんはそこから銃を取り出して、僕に見せてくれました」

「それから？」 雅貴が促した。

「そのあとに釣りに行く予定だったので、十時十分ごろに小屋を出ました」

「ずいぶん長い間銃を見てたんだね」

「叔父さんのせいですよ。事細かに猟銃と、あと弾の説明をしてくれて、最後には実際に銃に弾を込めるところまでやっただけですよ。」

しかも、そのあとにこれまでにしとめた獲物の話を長々としたから、そんなに長くかかったんです。それから急いで銃と弾を片づけて、あっ、そうだ！」ここで頼斗はあることに気がついた。それは事件と関係のないことかもしれないが、頼斗は雅貴に伝えることにした。「そういえば叔父さん、片づける時に銃から弾を取り出さないまま物置に入れてました」

「それは危ないな」

「たぶん話に熱中しすぎて、うっかり抜き忘れただけだと思いますけど」

「そうか。それで釣りが終わった後は？」

「旅館に帰りました。それで昼食を食べて、自分の部屋に戻りました。そのあとの叔父については知りません。またどこに出かけていきました。次に見かけたのが夜、食堂で皆さんと飲んでいたところです」

「君が健二さんと一緒にいる間、何か変わった出来事はなかったかい？ もしくは叔父さんが誰かと話し込むようなこととか」

「変わった出来事といわれて頼斗は釣りの最中に叔父が提案したことが思い浮かんだ。

「事件とはぜんぜん関係ないように思えるんですけど、釣りをやっているときに、叔父さんが僕にここの旅館のあとを継いでくれないか、と言ってきたんです。叔父さんはもう年齢的に仕事を続けるのがしんどかったようです。でも叔父さんはこの旅館をなくしたくないという気持ちもあったんです」

「なんで君が選ばれたんだ？ 健二さんには子供はいなかったのかい？」

「いるんですけど、別の県に定住して、こっちに戻ってくる気はないみたいです。それで、実は僕、職を失ってしましてね。叔父さんから見たら調度いいと思えたんでしょうね。でも結局、僕も断りましたけど」

これを聞いて雅貴はずいぶん驚いた。

「どうして断った？ チャンスが目の前に転がってきたんだぞ？」

「僕がやりたいこととは違うんですよ」

雅貴は口を開きかけたが、何も言わずに頼斗に背を向けた。

「少し出かけてくる」雅貴はそう言うつと商店街の方を目指して歩き出した。

頼斗はその後ろ姿をぼんやりと見送ることしかできなかった。仕方がなく旅館の中へ戻った頼斗は、ロビーで一人ぼつんと座っている美羽を見つけた。頼斗は美羽の隣に座った。

「由紀さんは？」

「少し一人にしてほしいんですつて」美羽は頼斗を見て弱々しく答えた。

「そう」それ以上言葉が出なかった。

しばらく沈黙が続いた。重い空気が辺りを包みつつあったが美羽がそれを破った。

「信じられません。健二さんが殺されたなんて。私には、何がなんだかわかりません」

最後の言葉は搾り出すような声であった。叔父はみんなに好かれていたのだ、そんな思いが頼斗の心を揺らした。そんな叔父が誰かに殺された、叔父はもう戻ってこない。そう考えた途端に、今まで麻痺していた頼斗の心に急に怒りが満ちてきた。

頼斗は美羽の顔を見た。美羽はうつむき、その頬には一筋の涙がたっていた。頼斗はすぐに視線を元に戻した。何もできない自分を齒がゆく思った。

その夜、雅貴は今回の不可解な事件について考えていた。時刻はすでに一時をまわっていたが、彼の思考が鈍ることはなかった。

まず、事件現場の様子を思い返した。小屋は完全な密室。警察が小屋に来るまで雅貴と頼斗が小屋の中にいたため、小屋の中に犯人が隠れて、あとでこっそり抜け出した可能性もない。健二は胸を彼のライフル銃で撃たれて死んでいた。警察も言っていたが自殺の可

能性は限りなく低い。

次に昼間に商店街で聞いた健二の人柄を整理した。誰も彼もが健二を？いい人？と評価していた。殺される動機は今のところ見当たらない。そこで雅貴は自分自身で健二の性格というものを分析してみた。ここに来てから、これまで健二からどんな印象を受けたか。それをじっくりと考えてみた。まず最初に思い浮かんだ言葉が自慢屋だった。健二は長々と、自分が過去にやった誇れることを、他人に話す癖があった。狩りで大物をしとめたことや、納屋からへびを放り出したことを話していた時の健二は実に満足そうであった。雅貴にはもう一つ健二の性格を現す言葉を見つけた。それは勇敢という言葉であった。健二の話が本当なら彼は昔からかなりむちゃなことをやっていたようだ。多少の誇張はあるかもしれない。しかし彼の話の中で、彼は普通の人なら気後れしてしまうようなことも軽々とやってのけていた。

ここまで考えても、健二のマイナス要素は見受けられなかった。殺人を引き起こしかねない要素をあえてあげるとしたら健二の勇敢さだ。これに正義感が合わさったとしよう。仮に健二が誰かの後ろめたい不正を知り、それを告発しようとしたために消された可能性はある。しかし、この考えは空想の域を出ないものだ。雅貴はまだ何の糸口も掴めていなかった。とにかくわからないことが多すぎる。最大の疑問は犯人がなぜわざわざ密室を構成したのかという点だった。自殺に見せかける、誰かに罪を擦り付ける、という目的で密室を作るのはわかる。だが、ライフル銃を凶器として使用したことで、警察も他殺と判断した。これでは密室にした意味がない。

意味のない密室の次に雅貴が気になっていたのは、他殺の予感を雅貴に感じさせた例のこすられた血痕だった。雅貴にはあのこすれ方が妙に思えた。靴底でこすれたなら、あんなに滑らかに血がのばされるはずがない。どちらかという指でなでたような感じだったが、指でこすったわけでもなさそうだった。指でこすると当然指紋のあとが見られるはずなのだが、あの血痕にはそれがなかった。

手にゴム手袋をはめた状態でこすつたとすれば、血痕はあのように見えるだろう。しかし、わざわざゴム手袋をはめた指で血をなでる奴などいるのだろうか？ 自問してみたが答えはノーだ。詰まるどころ、雅貴はあの血痕がどのようにしてできたかがさっぱりわからなかった。

無意味な密室、動機不明、不可解な血痕、これらのことについて、雅貴は延々と頭を悩ませた。いつの間にか時計は午前三時を示していた。しかし、雅貴は時間をまったく無駄に使ったわけではなかった。眠りにつく前に雅貴は一つの考えが残っていた。

これは本当に殺人事件なのだろうか？

夜が明けて、時刻はもうすぐ正午になろうというときに、頼斗は旅館の前でうろつろしている雅貴を見つけた。雅貴は旅館の前で、左右へ行ったり来たりを繰り返していた。その顔は厳しいものだった。頼斗は事件の解決がうまくいっていないのだと思った。頼斗はそつとしておこうと思ったが、意外なことに雅貴のほうから頼斗に話しかけてきた。

「頼斗くん、もう一度確認しておきたいことがあるんだけどいいかな？ 健二さんが君に猟銃を見せて、それからまた物置にしまうときに猟銃に弾が込められたままだった。これは自信を持っていえるかい？」

頼斗は改めてこのことを訊かれる意味がわからずに困惑したが、すぐに答えた。

「ええ、確かに猟銃には弾が入ったままでした。叔父さんが銃から弾を取り出している記憶がありませんから」

「そうか、なら何らかの拍子に、引き金が引かれるようなことがあるなら……」

この言葉に頼斗は驚いた。

「ちよつと待つてください。叔父さんは誰かに撃たれたんですよ。何らかの拍子について、まるで事故のような言い方じゃないですか。

岩家さんだつて床の血痕のこすれで殺人だと思つてたじゃないですか」

「頼斗くん。私は昨日の夜に、昔からの友人の話を思い出してね。実にありえそうにないことを考えているんだよ」

「はあ」雅貴の言っていることがわからずに、頼斗は中途半端な相槌を打った。

頼斗は、雅貴が頭の使いすぎでおかしくなってしまったのだと思つた。あまりにも見るに耐えられないので、頼斗は気分転換を勧めた。

「あの岩家さん。昼食がまだでしたら、どこかに食べに行きませんか？」

由紀も美羽もこの事件のショックが残っており、旅館の食堂はまだ機能していなかった。「ああ、そうだな」雅貴も了承し、その場を離れた。

商店街まで行く途中、頼斗は昼食は何にしようかと考えていた。雅貴は相変わらず一人でぶつぶつぶやいていた。ほかの人から見ると完全に不審者だ。

民家がちらほら目に付くようになってきたところに、頼斗はある光景を目にした。それは一件の家の玄関口にあつた。その玄関の扉はすりガラスの引き戸であつたのだが、その引き戸に外からつかえ棒をしていたのだ。つかえ棒があるので、当然引き戸は動かない。しかし、棒が外にあるので、誰でも付け外しができてしまう。これでは明らかに防犯の役に立つはずがない。雅貴もその様子に気づき、それを見た。

「あのつかえ棒ってなんの意味があるんでしょうね？ 防犯になりませんよ」問題の家の前を通り過ぎながら頼斗が言つた。

「あれは防犯目的じゃない。家主の留守を意味するものだ。鍵はちやんとかかつていて、あの棒が戸に立てかけられていたら、今は留守ということだよ」雅貴がすらすらと答えた。

「ああ、そうなんですか」頼斗は納得した。「僕はてつきり鍵の代

わりだと思いました」

「今の時代は田舎だからといって治安がいいというわけでもないからね。君の叔父さんも戸締りはしっかりしていただろ」

「いえ、そうでもありませんよ。一昨日釣りに行ったときに、窓もドアも全開にして、開けっ放しのまま出て行きましたから」

この言葉を聞いた雅貴は急にその場に立ち止まった。先ほど、頼斗が言ったことに明らかに興奮したようだった。その表情は緊張で固まり、見開かれた目で頼斗を見つめた。

「今の話は本当か？ もっと詳しく聞かせてくれないか」雅貴は前のめりになって訊ねた。

「え、えつとですね」頼斗は雅貴の迫力に圧倒されながら、おずおずと答えた。「猟銃を見せてもらいに叔父の小屋に言ったときなんですけど、流し台の排水口にネズミの屍骸があつて、そのせいで小屋の中がひどい臭いだったんですよ。それで換気のために窓とドアを全部開けて、そのままの状態でまた出かけたんですよ」

「どのくらいドアを開けっ放しにしておいたんだ？」雅貴からはいつもの静かな口調はすっかり消えていた。

「えつと、はつきりとはわかりません。でも釣りから帰ったときも、そのままだったんで最低でも四時間は開けっ放しでした」

この答えを聞いたとき、雅貴の頭の中に立ち込めていた最後の霧が晴れた。とある仮定へと通じるすべての道筋がはつきりと姿を現した。そして雅貴は、彼自身が考え出した仮定が事件の真相だと確信していた。

「小屋まで戻るぞ」雅貴はそう言うときびすを返して走り出した。

「え？ ちょ、ちょっと待ってくださいよ」

今回の出来事は殺人であつて、殺人事件ではない。これが雅貴の出した答えだった。

二人が小屋にたどり着いたときには、雅貴にとって運のいいことに、小屋の中から坂本警部が出てくるところだった。

「坂本警部！」雅貴が警部に声をかけた。

「これは、これは、岩家さんではありませんか。どうかされましたか？」

「お聞きしたいことがあります。現場を捜査したときに、隅から隅まで調べましたか？」

坂本警部は迷惑そうな顔をした。

「確かに噂であなたは優秀な犯罪捜査コンサルタントであることを聞いていますよ」警部は噂という言葉を強調した。「しかし、今のあなたにはこの件を捜査する権利はありません。我々が要請を出さない限りあなたは部外者なのですよ」

「ええ、わかってます。しかし、あなたが質問に答えてくださることで、すべてがはつきりするかもしれないのです」

「はつきりする？」警部は驚いて訊き返した。「あなたは犯人がわかったのですか？」

「自信はありますが、最後の確認をしたいのです。だからお訊ねします。小屋の中は隅から隅まで調べましたか？」

警部は雅貴の言葉に半信半疑だったが、質問に答えてくれた。

「ええ、全体を調べましたよ。といっても狭い小屋なので骨を折ることもなかったですよ。机の引き出しや戸棚の中もすべて見ました」「隙間もですか？」

「はい？ 隙間？」警部はおもしろいくらいきよんとした。ずっと雅貴のそばに立っていた頼斗もこの質問の意味がわからなかった。そんな二人をよそにして雅貴は続けた。

「ええ、隙間です。本棚と壁との隙間とか、引き出しと床との隙間とかの隙間です」

「そこは調べてませんが」警部は不信感を隠そうとしなかった。

「では、調べてみましょうか」そう言うと、雅貴はそばに落ちていた細長い木の枝を拾い上げた。そしてあっけにとられている警部を見てこう言った。

「部外者を現場に入れたことはご心配なく、このことは口外しませ

ん。私も彼もね。私たちはこの時間にここにいなかったものだと思うってください。だから私の考えが正しく、事件が解決しても、その手柄はあなたのものです」

ここまで言われると警部も引き下がるしかなかった。

小屋に入ると、雅貴はまっすぐ本棚へと向かった。そしてその前に膝をつき、本棚と床の隙間にさっき拾った枝を入れて、動かし始めた。奇妙な光景であった。その姿は自動販売機の下に落ちている小銭をさらっているかのようだ。

頼斗もその隙間を見たが、隙間の幅は一センチよりも少し大きいくらいしかなかった。隙間には光が届かないため暗く、中の様子はわからなかった。こんなところにいたいなにあるのだらうと、頼斗は思った。こんな狭い場所には、紙切れや小さなごみ、それとやはり小銭くらいしか入らないだろう。

二十秒くらい隙間をかき回してから、雅貴は立ち上がり、今度は寝室に移動した。彼は引き出しの前でまた膝をつき同じように枝を突っ込んで動かした。

その隙間もさっきの隙間と同じくらい狭かったが、枝を動かした瞬間、雅貴には勝利の笑みが浮かんだ。雅貴は必死に枝を動かし、何かをかき出そうとしていた。

頼斗と警部はそれを見たときに思わず一步後ずさりしてしまった。それはのろのろと引き出しと床の隙間から出てきた。全身が小さな茶色の鱗に覆われた体の持ち主は静かに地面を這い、白日の下にその姿を晒した。

暗き淵より這い出たもの、それは一匹の蛇であった。

結の章：トリガーを引いたのは……

蛇の体の横についた黒い線の模様を、枝で指しながら雅貴が言った。

「シマヘビですね。どこにでもいるごく普通の蛇です」

頼斗と警部を仰天させたのはその次に雅貴が言ったことだった。

「こいつを鑑識に送ってください。きつと硝煙反応がみられるでしょう」

「ちょ、ちょっと待ってください」動揺しながら警部が言った。「硝煙反応って、いったいどういうことですか？」

「この蛇が健二さんを撃ったんですよ」

これには警部も完全に固まってしまった。

「そんな……馬鹿な。ありえない。いったいどうやって撃ったのですか？　そもそも何でこんなところに蛇がいるのですか？」警部は狼狽して訊ねた。

雅貴は静かに話し始めた。

「混乱されるのも無理はありません。あなたにもわかるように最初から説明します。すべての事の始まりは一昨日になります。ここにいる頼斗君と健二さんは朝の九時にこの小屋を訪れました。そのときに小屋の中では異臭がしたそうです。その原因は流し台の排水口で死んでいたネズミの屍骸でした。そこで健二さんは屍骸を取り除いてから、窓と入り口のドアを開けて小屋の換気を行いました。

そこからの行動がまずかったのです。健二さんは入り口を開けっ放しにしたまま、頼斗君をつれて外出してしまっただけです。その結果、ドアは何時間も開けっ放しのまま放置され、この蛇がネズミの死臭に惹きつけられ家の中まで進入したと考えられます。

おっと、大事な点を一つ話し忘れていました。小屋にいた間、健二さんは頼斗君に猟銃を見せていたんです。そのときに、健二さんは実際に猟銃に弾を込めたのです。これは実に危ない行為なのです

が、健二さんはそれほど気にしなかったのでしょうか。ところが、狩りの話に熱中するあまり、健二さんは猟銃から弾を取り出すことを忘れて、そのまま猟銃と弾をしまつてしまつたのです。これが後の悲劇の原因となつた最も重要な点です。

そして時間が経ち、その日の深夜です。ここからは私の想像となりますが、間違つてはいないと思います。健二さんは彼の友人二人とここで夜遅くまで酒を飲んでいました。友人二人はそろつて零時半に帰りました。

ここからが悲劇の幕開けでした。一人になつた健二さんは、入り口のドアに鍵を掛けます。窓の鍵はすでにかかつていたと考えていいでしょう。これで密室が完成しました。健二さんは次の日の朝に、友人の仁さんと狩猟に行く約束をしていました。そのため、コップや酒類を片付けた後に、明日の狩猟の準備をしてから、この小屋で一晩を明かすつもりだつたのです。健二さんは狩猟の準備に取りかかり、物置から道具一式を運び出しました。そしてそのときに入り口がある部屋でこの蛇を見つけたのです。

健二さんは過去にも似たような経験をしていました。そのときは納屋の中でしたが、やはり大きな蛇がいたそうです。そのときは、クワで蛇の首を押さえつけて、蛇の動きを止めてから噛まれないように蛇を持ち上げて遠くのほうへ投げ飛ばしたそうです。

今回のことはこれに酷似していました。ただ場所が納屋から小屋へ、手に持ったものがクワから猟銃に変わっただけです。健二さんは猟銃を自分の手足のように使えると豪語していました。なので、まわりにあつた道具で一番蛇を押さえるのに使いやすかつたのです。健二さんは銃底で蛇の首を押さえつけようとしていました。そして実際に押さえつけたのでしょうか。そんなことをすれば当然蛇はびっくりして抵抗します。体をくねらしたり、銃に巻きついたりしてね。ここで考えてみてください。銃底で押さえつけると、健二さんは銃身を手に持ち、銃口を自らの体に向けていたことになります。その状態のまま蛇の体が、弾の入つたままの猟銃の引き金に巻きつき、

偶然にも引き金を引いたとなると……それは深く考えるまでもありません。健二さんめがけて弾が発射されます。そして、実際にそれが起きたのです」

頼斗も警部も舞台上の役者の演技を鑑賞するかのように、一言も口を挟まずに雅貴の話をずっと聞いていた。二人とも雅貴の独白に完全に飲み込まれていた。

「健二さんは胸に弾丸をうけて亡くなりました。そして、自由になった蛇は敵から逃れる本能として、狭い隙間へと逃げ込んだのです。そのときに床に飛び散った血の上を這って行ったために、こすれた血痕ができました。」

あとはもう詳しく語る必要もないでしょう。私たちが亡くなった健二さんを見つけて警察に連絡しました。この事件は密室殺人のようには見えましたが、実際はそんな複雑なものではありませんでした。引き金を引いたものは、普通なら調べないような場所にずっといたのですから。」

坂本警部、この一件は不運な事故として処理してください。私たちの話は以上です」

警部は事件の真相と雅貴の圧倒的な推理の前に、平常心を保っていられたかった。それでもやつのことで口を開いた。

「岩家さん。あなたの話は筋が通ってるし、実際に蛇も見つかりました。おそらく岩家さんの言われたことが真相なんでしょう。しかし、どうして蛇の仕業とわかったのです？」

雅貴はかすかに微笑んだ。

「私の昔からの友人でだいぶ変わった奴がいましてね。蛇が好きで家で十匹くらい蛇を飼ってるんですよ。そいつは蛇に関する面白い話をいくつも持ってましてね、一度蛇に撃たれた男という話を聞かされたことがあります。」

一九九〇年代のイランで、友人と狩りに出かけた男が狩りの途中で蛇を見つけたんです。その男は蛇を捕まえてペットにしようと考えました。そこで生け捕りにするために、猟銃の銃底で蛇を押さえ

つけたんですが、暴れた蛇の尾が引き金にあたり、銃から弾が撃たれました。男はその弾丸を頭にうけて死んでしまいました。

つまり私は前例を知っていたわけです。あとは蛇が、小屋の中に入るタイミングがあったかどうかがわかればよかったのですよ」

警部を支配していた緊張が解けた。

「その話が聞けてよかったですよ。でなければ私はあなたを神の使いとも思ふところでしたよ」

次の日の昼、雅貴はバス停にいた。隣には頼斗が見送りに来ていた。

「今回は本当にありがとうございました。あなたがいなければ真相は闇の中でしたよ」頼斗は改めて礼を言った。

今朝早くに坂本警部から連絡があった。昨日見つけた蛇から硝煙反応がみられたそうだ。おまけに腹には血液が付着したあとがあるというのだ。血液型は健二と同じB型で、さらに詳しく調べると健二の血液と同一のものだという結果が得られるだろう、というのが坂本警部の話だった。これで雅貴の推理の正しさが証明されたことになった。

「それはいい過ぎだよ。あの蛇はいずれ誰かに見つかったよ。私は事件解決までの時間を少し早めたに過ぎない」

「でも、蛇が見つかったても警察が詳しく調べるとは限らないじゃないですか。やっぱり岩家さんはすごい人ですよ」

さすがの雅貴も気をよくしたのか、普段は感情を感じさせないその顔にやわらかな笑みを浮かべた。

道の遠くのほうからバスがやってくるのが見えた。雅貴が乗るバスだ。それがもうすぐバス停までやってこうというときに雅貴がおもむろに口を開いた。

「頼斗君、最後に一つだけ言っておこう」雅貴は穏やかな口調で続けた。「事件とは関係ないことなんだけどね。君はあの旅館の跡継ぎになったほうがいい」

「なんでそんなことを……」雅貴が意外なことを言い出したので、頼斗は困惑した。

「返事はしなくていい。ただ話を聞いてくれるだけでいいんだ」雅貴はそう言っ、頼斗の言葉を遮った。「君がどんな生き方をしようがそれは君の勝手だ。私が口を出すことではない。だが、人生に特別な意味を見出そうとしてはだめだ。そんなものは哲学者の仕事だよ。生まれてから死ぬまでに歩んだ道の中で、最高に楽しい思い出を一つだけつくる。そんな思い出ができれば、私は十分な人生だと思う。」

まあ要するにもう少し適当になっても、意外となんとかなるということさ。周りの流れに身を任せてみるのも悪くはないことだ」

バスがやって来て止まった。

「女将さんもきつと歓迎してくれるよ」

バスの扉が開く。雅貴は一步步み出たが、最後に頼斗の方を向いてこう言った。

「それに君自身も、あの美羽って娘と一緒にいれてうれしいはずだよ」

頼斗は顔を赤くした。最後の最後にとんでもないことを言ったものだ。雅貴はバスのステップを登り、車内に姿を消した。扉が閉まり、バスは発車した。頼斗は揺れる心のまま、見えなくなるまで、バスを眺めていた。

「蛇に撃たれるなんて、なんて間抜けな死に方なんですよ。悲しいやら情けないやらで胸がいっぱいだわ」由紀はだいぶ立ち直っていた。しかし、事件の真相を知ってから、ずっとこんな調子で嘆きっぱなしだった。

「それでも叔父さんが誰かに恨まれていなかったことがわかったじゃないですか」頼斗は何とか由紀を励まそうとした。

「ええ、わかってるわよ。それがせめてもの救いね。はあ、お葬式の準備をしなきゃいけないから忙しくなるわね。でもあの人が亡く

なつて、この旅館もこれで終わりかしら」由紀は寂しそうに言った。

「ねえ、叔母さん」

このとき頼斗はすでに吹っ切れていた。彼は人生を難しく考えすぎていた。だから岐路の選択を迫られたときも、いつも難しいことを選びがちだった。

だが今は違う。深く考える必要はない。目の前にチャンスがあるなら、どんなものでもかまわない。迷わず飛びついてやれ。

「そんなに弱気にならないください。この旅館まだ続けてみましょうよ。僕もここで働いて叔父さんの分もがんばりますから」

結の章：トリガーを引いたのは……（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございます。

はじめて投稿させていただきました。J・P・フリーマンです。

書き終わって今回の作品を冷静に見ると偶然に頼りすぎている部分があり、失敗したなというのが私自身の感想です。意外性はあったと思うんですが、もっと自然な流れで物語を運べたらよかったと感じています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258v/>

トリガーを引くもの

2011年8月2日03時27分発行